

2021年11月25日発行

地域と協同の 研究センターNEWS

207号

「2021協同集会in東海」が開催されています！

熊崎 辰広（2021協同集会in東海実行委員）

これまでの経過

「2021協同集会in東海」は、2014年の開催から今年で第4回となります。この協同集会は、日本労働者協同組合センター事業団東海事業本部が事務局となり、研究センターや生協関係者、NPO法人からなる実行委員会によってこれまで運営されてきました。第1回は、2014年9月に名古屋市立大学滝子キャンパスで開催されました。テーマは「地域で発見。『協同って何？』」でした。第2回は、2017年10月に、第1回と同じ会場で開催されました。テーマは「ともに生き、ともにはたらく地域をつくり次世代へつなぐ」でした。第3回は、2019年9月に名古屋工業大学で開催されました。テーマは「ともに生き、ともにはたらくー未来へつなぐ協同の再発見 私たちに、今できることはー」でした。このように、2年又は3年の間隔で、会場に集まり、全体集会と分科会を1日で開催してきました。

今回の企画は、コロナ禍から、同じ会場にたくさんの人が集まるとい開催が困難なこともあり、分科会を全体集会の前に、分散してZoomでのオンライン参加も併用して開催することになりました。今回初めての試みですが、より参加がしやすくなり、従来は1日で集まっていた開催のため、分科会も一人が一つの分科会にのみしか参加できませんでしたが、今回は希望すればすべての分科会に参加できるようになりました。全体集会は2022年1月23日を予定しています。今回のテーマは「ともに生き、ともにはたらくーつなぎなおす『協同による新しい日常』」です。

今回の開催主旨

あらためて、今回の開催主旨を、その主旨文にそって紹介します（一部省略）。

「私たちは2014年から3回にわたり「協同集会」を開催してきました。「協同」とは何か、その価値や可能性を自らの住む地域に引き付け、「ともに生き、ともにはたらく」をテーマに、集会に参加する人々と「働きづらさ」「生きづらさ」「貧困と格差」「孤立」等、様々な社会課題、地域課題に取り組む人々の実践から学び、未来への探求を重ねてきました。

2020年、新型コロナウイルスによりパンデミックが起り、生活や命を揺るがすこれまでに経験したことのない事態に直面しました。」

「露わとなった社会の脆弱性は、人々から仕事や安心を奪い、生活困難さをさらに深刻なものにしています。このような社会情勢の中、私たちにできることは何か。コロナ禍により失われた「互いにささえあって生きていること」自分も誰かに支えられていること」への気づきを通して、互いの繋がりを強めていくことです。」

【2頁につづく】

研究センター11月の活動

2日（火）三河地域懇談会世話人会(生協総研全国研究集会参加)	18日（木）金城学院大学「協同組合論⑧」
4日（木）金城学院大学「協同組合論⑥」	20日（土）第5回共同購入事業マイスターコース
11日（木）金城学院大学「協同組合論⑦」	24日（水）三河地域懇談会世話人会
12日（金）第6回協同の未来塾	25日（木）金城学院大学「協同組合論⑨」
13日（土）第5回友愛・協同セミナー	11月25日（木）26日（金）難民食料支援物資受付

※ 各行事は新型コロナ感染対策をとって実施しています。

目次	「2021協同集会in東海」が開催されています！	熊崎辰広	1	岐阜県白川町フィールドワークから学ぶこと	8
	2021協同集会in東海 多文化分科会に寄せて	王榮（木下貴雄）	3	情報クリップ	10
	三重地域懇談会 多文化共生プチフォーラムを開催して	妹尾成幸	6	書籍紹介	12

<巻頭言：1頁よりつづく>

「2020年12月雇用労働を中心としてきた日本社会に、自らが出資し、意見反映させながら、地域で必要とされる事業に従事することを原理とする新しいはたらき方（協同労働）に関する「労働者組合法」が成立しました。日本における協同労働40年以上の歴史と実践があり、運動の成果とも言えます。第4回となる「2021協同集会in東海」では、多様な選択肢や人々によってたすけあい、ささえあう地域づくりの東海地域における実践を共有し、コロナ禍により分断された日常を新しくつなぎなおす「協同の価値」を皆さんとともに深め合い、持続可能で活力ある地域社会を創りだすための一歩とします。」

分科会の内容

分科会はすでに9月から開催されています。開催した分科会は9月26日「**多文化背景をもつ人々たちによる多様な取り組みと協同がもたらす新しい社会**」です。この内容については、後半で報告します。また分科会「**はたらくってなに？—働くを語り合う座談会**」が10月31日に開催されました。ここでは、ワークスコープや「わっぱの会」等で働いている数人の方から、仕事の思いなど、を語り合っていました。

これからの開催分科会は、11月28日に、「**生活の中で工夫して自然を生かす体験**」として愛知県美浜町にある「季の野の台所」が会場で、主に子ども達を対象に自然のなかでの仕事や物創りの体験をします。

12月12日は、分科会「**地域の中ではたらく—小さな協同の実践と仕事づくり**」として、岐阜県山県市の北山で、農家レストランなどの運営をおこなっている、元集落支援員の方の仕事づくりを語ってもらいます。

12月19日は「**学校給食をオーガニックに**」という分科会で、子をもつ若いお母さんたちの署名活動や、それを支えた有機農家の人たちの活動を報告します。発信は多治見市からです。

12月26日は分科会「**子どもの学びの支援**」で、2017年に開催した協同集会での分科会を契機に発足した「地域における子どもの学びの支援共同研究会」の企画です。さらに来年の1月16日には、分科会「**地域の中ではたらく**」の二つ目の企画で、中津川市蛭川の地域にある介護福祉施設「ひなたぼっこ」の仕事づくりの実践と、協同労働としての思いなどが報告されます。

また、協同集会の関連企画として「学生と協同を学ぶ」として名城大学（ボランティア入門）、金城学院大学（協同組合論）の講義へのZoom参加も紹介しています。

（くまざき たつひろ）

分科会「多文化背景をもつ人々たちによる多様な取り組みと協同がもたらす新しい社会」

神田すみれ（2021協同集会in東海実行委員）

9月26日に「2021協同集会in東海」多文化分科会をオンラインで開催しました。報告、広報、運営は「多文化社会と協同組合懇談会」のメンバーが中心となって進められました。案内チラシは中国語、ベトナム語、英語、スペイン語、韓国語の多言語へ翻訳をし、広報をしました。午前の部は、ブラジルルーツの若者、高齢者生協の訪問介護事業所で勤務するペルー出身のお二人、そして夜間中学の会の代表から学習支援の取り組みの報告をいただきました。

お昼の部は、愛知県立大学、中京大学、淑徳大学の学生が団地で毎週開催している海外ルーツの子どもたちを対象とした日本語教室の取り組み、そして、自動翻訳ツールの紹介です。午後の部は中国帰国者と在日コリアンのお二人の対談、アメリカと日本のハーフとしての想い、福祉施設で勤務するベトナム出身の元留学生からの報告です。東海地域に暮らす海外出身、海外ルーツの人たちから「つなぎなおす協同による新しい日常」が語られる時間となりました。最後に、日本生活協同組合連合会の和気未奈さんとワークス・コレクティブ・ネットワークジャパンの藤井恵理さん、お二人の対談で、協同とコミュニティ、同質性から多様性の社会に向かっていく中での協同の力について意見が交わされました。

ワークス、生協、農協、医療福祉生協、高齢者生協、大学生協と、多くの協同組合関係者の参加があり、100名近い参加者とともに、これからの多文化社会に向けて知り、考える機会となりました。

（かんだ すみれ）

2021 協同集会 in 東海 多文化分科会に寄せて

王榮（木下貴雄）

1、海を越える旅人たちが歩む道

中国の文学者・魯迅氏がいわく「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない、歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」

人類はその誕生から相反する二つの性向をもっている。移動と定住である。人は必要に迫られ、または、必要に応じて新天地によりよい暮らしを求めて移動する。新天地に定住し、新しい生活を営む。人はまたさまざまな衝動や渴望に駆られて、個人として、または集団として、再び移動し、定住する。今も昔もそのサイクルは変わることなく、人はさまざまな動機から移動する。移動する人の数だけその思いが託されている。言い方を変えれば、移動は「旅」であり、移動する人は「旅人」であるともいえる。夢や希望、理想を求めて、人々はその旅の「道」を歩み続ける。その旅には、明日への希望に胸を膨らむ旅立ちもあれば、貧困や戦乱、災害などから逃れるための強いられた困難な旅立ちもある。

2020 年 12 月末現在、世界 194 ヶ国から 288 万人の異文化背景を持つ人々が、日本で生活者として、地域社会の一員として暮らしている。この人々はいわば日本を新天地として目指してきた「旅人」たちである。老若男女、学ぶ人、働く人、暮らす人等々、実にさまざまである。生活を営む過程のなかで日本社会とのかかわりが深まり、さまざまな変化が生じて、終の棲家に至って日本社会に生活基盤を築っているのである。

旅人たちは「道」をたどって日本に訪れたのである。広くて見通しのよい「道」が旅人にとって安心できる安全な道でもある。日本に訪れた旅人の旅道は、在留資格を渡り歩く旅道であるともいえる。そして、その旅道の終着駅は「永住」である。

古来、旅にはメンター、つまり、助言者や案内者、先達がつきものである。メンターは裏方に徹しながら、土地に不案内な旅人のために道を切り開き、適切な助言を授け、さまざまなサポートを行う。

どのような旅にせよ、そこには必ずめざす目的地があり、ゴールへの道がある。それは一時的な滞在地かもしれないし、場合によっては終の棲家になる場所かもしれない。旅立ちの事情と旅人の意思、時には運命がその目的地と道を決める。日本もまたこのような目的地のひとつであり、歩む道である。かくして、今後も多くの異文化背景を持つ人々がさまざまな思いを胸に抱いて、日本を訪れてくるのであろう。

道は一つであるように思えるが、道は一つではなく、さまざまなであり、それぞれである。平坦な道もあれば、凸凹の道もあり、迷い道も、曲がりくねった道もあろう。

「この道を行けばどうなるものか、危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし、踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる、迷わず行けよ、行けばわかるさ。」は、アントニオ猪木さんの座右銘のようである。

「続いてこそ道」は、一灯園・石川洋先生の言葉である。

それぞれの道を、それぞれの速さで歩めばいい。諦めずに歩めば、いくつもの時代が過ぎゆくなかで、旅の地図になかった小径は、誰もが歩みやすい平らな道になることを信じて。

2、歴史を鑑み 今を見つめ直し 未来を描く

2021 年現在、この日本という空の下で、日本人も含めて、195 ヶ国・出身地の人々が肩を寄せ合って暮らしている。単純に言えば、195 の異なる文化、自分と違う「他文化」が共存している。そういう意味では、日本はもう「単一文化社会」ではなく、「多文化社会」になっている。これは間違いない事実である。日本は「多文化社会」にはなったが、“多文化「共生」社会”になったか、と問われると、その答えは、人によってそれぞれだろうと思う。私の答えは、NO である。

最近、新たに素朴な疑問が出てきた。異なる文化背景を持つ者同士が「共生」する、つまり、ともに暮らし、ともに生きるために、そもそも論になるが、「多文化」という“冠”を付けなければ、ともに生活を営むことはできないのか、ということ。

2000 年代、なぜ、突如に「多文化共生」が提唱されるようになったのか、その背景と経緯をまずきちんと理解する必要があると思う。多様な文化が仲良くともに生きていきましょう、という理想なスローガンに捉われて、その背景と経緯を表面的な理解だけでは、果たして真の「多文化共生」が生まれるのだろうか。

今、日本社会で進められている「多文化共生」とは何か、その理想なスローガンに踊らされることなく、冷静に見極める必要があるのではないのでしょうか。

日本の“多文化「共生」社会”を語るうえで、「過去・現在・未来」という視点で考えなければならないと思う。つまり、過去の歴史を鑑み、今の実態を見つめ直し、あるべき姿の未来図を描くこと。しっかりした基礎工事をせずに、高層ビルを建てれば、いずれグラグラになって、崩れ落ちてしまうのであろう。

かつて日本は、大東亜共栄圏構想により、日本支配下の朝鮮半島、台湾で採った「皇民化政策」があった。植民地支配下の民衆を皇民化、「天皇のもとでの日本人」、つまり、日本人と同質の大日本帝国の国民となることを強制することであった。

具体的には、朝鮮・台湾においては、以下のものがあった。

- ・日本語（国語）を徹底させるための教育。
- ・天皇崇拝、日本の神社参拝などの強要。
- ・姓名を日本人と同じに改める。
- ・志願兵制度、徴兵制度を導入、戦時動員体制の強化。

また、その反面として、各民族独自の言語、文化、宗教、さらに民族歌や民族旗は抑圧されたり、禁止された。

さらに、日本の植民地支配下の台湾出身者や朝鮮半島出身者などは労働力として日本に連れて来られた。日本の敗戦により、日本に連れて来られた者の多くはそのまま日本に在住している。在住者数でいうと最も多いのは朝鮮半島出身者である。1950 年代、この人々の日本人としても身分を突如に剥奪され、外国人にされてしまった。日本における外国人の在留管理と施策はここから始まり、社会や人々による民族差別も同時に始まってしまった。突如に外国人にされてしまった在日コリアンは社会からの排除を受けて、既存の社会保障制度などを利用することができず、想像に絶するようないじめ

や差別のなかで生きていかなければならなかった。こうした背景から生まれたのは“在日コリアンよる在日コリアンのため”の諸支援であり、自分たちが主体となって起こした社会運動によって、さまざまな差別を撤廃させ、日本社会における自分たちの社会的地位の獲得を奮闘されてきたのである。

1990 年代以降に来日したニューカマーと言われる異文化背景を持つ人たちは、その一部の恩恵を受けている、という事実を果たしてどれだけの人知っているのだろうか。いま、当たり前になっていることは、実は過去はそうではなかった。“在日コリアンよる在日コリアンのため”の諸支援が、日本に暮らす異文化背景を持つ人たちのためにもなっていることは、ぜひ、多くの人々に知って欲しいと思う。

オールドカマーと呼ばれる在日コリアンの背景と経緯が歴史として存在しているにもかかわらず、今推進されている「多文化共生」の対象から外されている風潮を強く感じる。公的支援を受けている中国帰国者もその対象から外されている感がある。ゆえに、先ほど記したように、今の「多文化共生」は、この日本で暮らすすべての異文化背景を持つ者を対象としているのではなく、突如に提唱された時の背景と経緯の対象を共生の対象としているだけのではないかと考える。

半世紀以上にわたって日本で暮らしている人々の人権無視や社会的排除、差別等々の問題を解決もせずに、棚上げにしたまま、さあ、多文化共生しましょう、みんな仲良く暮らしましょうって、うまくいくはずがない。提唱する側も推進する側もわかりきっていることである。コロナ禍のなかで、日本社会（人）の特性について再発見した。上の言うことにまったく疑わずに従順に従う“従順主義”と、同調圧力で徹底的に縛りつける“集団主義”の二つ。この二つの概念から考えると、提唱されているから、みんながやっているからなんとかしないといけないという盲点に陥ってしまっているのではないのでしょうか。

多文化共生を謳っていれば、やっていれば、多文化共生社会がうまくいく、成立すると思われるかもしれない。そんなに単純に成り立つなら、誰もが苦労しないだろう。文化の共生とはなにか、私は生身の人間同士のぶつかりあいであると考えている。人の中に無意識に刷り

込まれている「文化」というものが、摩擦によって、自分と異なる文化を気づき、自分が持っている文化の良さを気づかされ、共通性と相違性が見いだされる。共通性を見出すことによって、共感が生まれ、それを共有することによって、ともに担い手としての協同が創り出されるのではないのでしょうか。何を協同するというより、何のために協同するのか、いつ、どこで、誰が、どのようにといったようなプロセスを経て、実践に結びついて開花し実を結ぶのではないのでしょうか。

3、ともに問題の当事者として

生活支援において、支援と被支援のという対極の構図があるように、いま推進されている多文化共生にも、日本人と外国人という対極の構図になっていることはすでに明白になっている。いわば、日本人である“私たち”と外国人である“あなたたち”との共生である。この構図のままでは、いつまでも“私たち”と“あなたたち”との間に溝が横わたる共生で、しかも、その溝は恐らく埋まることなく、お互いの距離が縮まらないまま、共生が続くことではないでしょうか。

そもそも、外国人単純労働者を短期労働力として、長期的な施策を講じずに受け入れたため、数年で国に帰るだろうと思っていた外国人単純労働者が帰国しなくなって、永住や定住する傾向が強くなって、地域の日本人住民との間でのさまざまなトラブルが大きな社会問題となってしまう、それをなんとかしないといけないため、突如に多文化共生が提出された、というのは真相ではないのでしょうか。しかも、明確な対応策を国として講じないまま、自治体にその対応を丸投げした。また、地域社会とそこに暮らす日本人住民は、これまでの静かな暮らしは、外国人の急激な増加によってそのリズムが狂わされ、混乱に陥り、同調圧力で徹底的に縛りつける“集団主義”的な発想が噴出し、共生するまえに排除に走り始めたのではないのでしょうか。日本はいま外国人に強く依存していること、外国人がいなければ自分たちの生活が成り立たなくなるという現実を知ろうともせず、我が事ではなく、他人事と思っていること、その意識と認識が多文化共生の大きな障碍となっているのではないのでしょうか。

多文化共生における問題は、日本社会（人）

だけに問題があるのではない。異文化背景を持つ人々にも同様である。この日本という空の下で、自分たちと子供たちの将来のために生活を営んでいくのであれば、お互いに理解し、尊重しあい、ともに生きていかなければならない。社会に問題があれば、周囲の力を借り乍ら、主体的に動かなければ、安定した社会的地位と生活を手にすることができないでしょう。何よりも次世代のキャリアデザインが描けなくなってしまう、夢や希望を失ってしまう恐れがある。なんとなく、誰かが助けてくれる、いまが良ければ先のことはその時に考えればいい、といったような考えを持たずに、自分たちの「生活設計」をきちんと描く必要があると思う。それは、自分たちのためであり、次世代のためでもある。

多文化社会における共生は、一方通行ではなく、双方向でなければ、成立しないだろう。

多様な文化が共存するために、互いの違いを理解し、尊重し、認め合うことが重要であり、その意識を持つことが大事である。他人事ではなく、みんなが当事者である、我が事として、一人一人が意識し、考えるようになれば、共生に近づいていくのではないのでしょうか。

繰り返しになるが、日本は本当に多文化共生を望むのであれば、「過去・現在・未来」という視点で捉え、考えていかなければならないと思う。1950年代に始まった外国人在留管理とその施策はどうであったか、そこに孕んだ問題はなんだったか、その問題が根本から解決したかどうか、なぜ、それが解決しなかったのか、その要因はなんだったのかなど、この歴史を振り返らずにして、いま進めている多文化共生は、「海市蜃楼（蜃気楼）」でしかなく、実を結ぶことがないまま、終わってしまうのではないかと感じている。過去に日本がたどってきた歴史を鑑みることなくして、明るい未来が果たして描けるのでしょうか。かつて「五族協和」を理念に挙げて建国した、日本の傀儡国家だった幻の国「満州国」の実態にならないために、何よりも次世代に「負の遺産」を残さないためには、過去の歴史を鑑み、今の実態を見つめ直し、あるべき姿を思い浮かべて、国籍・民族に関係なく、この日本というキャンパスの上で、暮らしをともにするすべての人の手で、誰もが望み安心して暮らせる、真の多文化共生社会の未来図を描いていかなければならないのではないのでしょうか。（おうえい（きのした たかお））

三重地域懇談会 多文化共生プチフォーラムを開催して

妹尾成幸(三重地域懇談会世話人)

三重地域懇談会は、10 月 16 日（土）に「知って、学んで、考える～あなたの身近な多文化共生」をテーマに、プチフォーラムを開催しました。その概要を報告します。

1. はじめに～なぜいま、多文化共生なのか

この質問を考えるにあたり、労働者問題（外国人雇用）とくらしの共生（外国にルーツを持つ方々と共に暮らす）の両面があります。急速にすすむ少子高齢化による労働力不足・外国人労働者の労働実態の問題、くらしにおいては「言葉や文化の壁」「制度の壁」「こころの壁」による日本人コミュニティとの共生の問題があります。

三重地域懇談会では当初、どちらも視野に入れて話し合いをおこないました。関わりのあるみなさんから、見聞きすることを始め、特にコロナ禍で顕著になってきた事例を拾い集める中では、あらためて「外国籍住民の方々は労働力ではなく、私たちと同じ生活者であり、地域をともによくしていく大事なパートナーとして受け入れる」こと、「私たちはその当事者である」ことを気づかされました。

そのことは労働者としての日本人も同じく、不安定な雇用と賃金のうえに暮らしています。多文化共生は、これからの日本社会と地域コミュニティを考えるうえで、まさに私たち自身の問題なのです。

2. 私たちの身近でおこっていること

一般的に、多文化共生は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と言われています。しかし、多文化共生ネットワーク エスペランサの青木幸枝さんは、「多文化共生とは、多様な生活背景をもった人々が互いの生存権を尊重しながら生きること、と認識するようになった。対等な関係とは、危機感を共有できる関係であると感じるようになった」と言われます。

青木さんと山田ロサリオさん（NPO 法人ボリ

ビア人協会 理事長）の言葉を通して、私たちは「外国人労働者が電話一本で解雇される現実、時には意図的な不当解雇をされる現実」を知り、「外国人労働者の権利が守られない労働環境は、必ず日本人の労働環境も悪化させる」現実を身近に知りました。

青木さんはさらに続けます。「この現実を突きつけた時、残念ながら、多くの人は直視を避け、彼らの問題だということに落ち着かせようとする。自らが安全圏にいると信じていたいという心理がはたらくからであろう。私たちの問題だと認識し危機を直視するのは、心的に大きな労力を要するため、無意識のうちに回避が生じる。しかし、回避しているうちに、どんどんこの国が壊れていく。この壊れていく音が聞こえる人と聞こえない人の間に分断が進んでいるのを感じる」と。

この分断については、多文化共生プチフォーラムで深めたかったのですが、時間の制約もあり、参加者のみなさんと意見を出し合うには至りませんでした。

長い時間をかけての実践から見いだされる声に大きな重みを感じています。

3. 地域の中で“ともに生きる（暮らす）”取り組み

山田ロサリオさんは、南米ボリビアから 1989 年に一家で日本へ移住され、夜間中学で日本語を習得されました。地域の教会で、スペイン語での生活相談・通訳のボランティアを経て、2010 年に『日本ボリビア人協会』を発足されています。現在も子どもの教育やボリビア人コミュニティの自立と発展に尽力されています。

和田京子さん（NPO 法人伊賀の伝丸（つたまる）代表理事）は、1999 年に「通訳という手段を生かし、言葉の壁を乗り越えて、ともに住み良いまちづくりを」と「伊賀の伝丸」を設立し

ました。命名には「心とところを伝えてまわる」意味が込められています。外国籍住民の来日・在住の経緯はさまざまで、「日系人とその家族、技能実習生や特定技能外国人、日本人の配偶者、特別永住権を持つ韓国・朝鮮籍の人、残留孤児やその家族、語学学校の先生や ALT（外国語助手）」など、多様化がすすむ中で、学習支援・若者の自立支援・フードバンクの食糧支援・差別偏見に関わる人権講演等をおこなわれています。

また、行政と支援機関からは制度や運用について取組みが報告されました。三重県（ダイバーシティ社会推進課 多文化共生班）では、2019 年に外国人サポートセンター（ミエコ）を開設のほか、通訳の育成、災害時のサポート支援者育成、外国人学生のインターンシップ等に取り組まれています。

松阪市（教育委員会学校支援課）「いっば教室」では、2007 年に「外国人児童生徒の人権にかかわる教育指針」策定後、初期適応支援教室「いっば」、就学前支援教室「ふたば」を開設、受入促進のための指定校の設置、アイデンティティ確立のための取組み、不就学調査の実施、就学年齢を超えた生徒の受入、進路ガイダンスの開催など様々な取組みがおこなわれています。

三重県国際交流財団（公益財団法人）では、多文化共生社会の実現にむけての推進・支援事業に取り組まれています。三重県から受託の外国人サポートセンター（ミエコ）等には、既に 1,000 件を超える相談が寄せられ、コロナ感染の影響による相談がその多くを占めていることなどが報告されました。

上原ジャンカルロさん（三重県国際交流財団）は、「多文化共生社会の実現にむけて、私たちにできることは、ちがいを受け入れ、ともに変化すること。わかりやすい日本語を使い、わかりやすい情報提供をおこなうこと。お互いが企画するイベントへの参加を通して理解を深めること」と言われます。

倉田麻里さん（ゲストハウス イロンゴ 代表）は、ちがいを受け入れ、地域（三重県白山町）でともに暮らされている一人です。倉田さんが営まれるゲストハウスには年間約 350 名の

利用（コロナ禍以前）があり、外国籍住民の方々を含め、ここでの出会いや交流に取り組まれています。地元から理解を拡げ、世界とつながっていく活動は多くのみなさんの共感をよんでいます。

4. プチフォーラムを開催して

今回は、地域社会における共生と協同について「知って、学んで、考える」場となることを趣旨として、「多文化共生に関わる現状とこれから」をいろいろな立場の方々から、お聞きしました。「多文化共生は自分ごとである」に関わり、以下のような感想をいただいています。

- 駆け出しの日本語教師でも一歩始められそうなのがありましたら、一緒に何か企画や活動をしてみたいです！
- いよいよ、やっと、共生の時代がきます。SDGsも事業活動も、組合員活動も、共生の視点を忘れないようにしたいものです。
- 岐阜県にも外国籍の方がたくさんいらっしゃいます。まずは現状を知り、県や自治体の取り組みや地域で活動されている方の取り組みなどを調べてみたいと思います。
- 私の所属する鈴鹿国際交流協会では、コープみえさんと連携することがこれまでもありましたが、コープさんの中で多文化共生にこれだけ問題意識を持っていたに感動しました。また協働ができる部分がありましたら提案していきたいと思います。（中略）生協の商品で外国料理を扱ってみるのも面白いと思います。100個を売り上げるごとにいくらかを多文化共生の事業に活用するなどの取り組みを併せて載せることで皆さんに意識を持ってもらいやすくなると思います。

生活協同組合へのご意見としては、ほかに「セレブしか買えない？商品の値段」の声をいただき、誰一人取り残さないためには、商品購入の仕組みについても考えさせられました。

これからも、多様な方々を受け入れ、ともにくらししていくことはどういうことなのか、自組織にとっても担う役割はなになのか、外国にルーツを持つ方々はじめ、多世代が地域の中でくらし続けられることを話し合っていきます。

（せのお しげゆき）

生協の（未来の）あり方研究会

岐阜県白川町フィールドワークから学ぶこと

小木曾洋司（中京大学現代社会学部教授）

1. 生協の「あり方研」再始動

「生協の（未来の）あり方研究会」（以下「あり方研」と表記）は、2009年5月に地域と協同の研究センター内に組織されました。生協に関心を持つ各分野の研究者と生協運営に長く関わっている実践家からなる研究会です。これまで、研究会として2冊の本を発表してきました。

『未来を拓く協同の社会システム』（日本経済評論社、2013年10月）、『協同による社会デザイン』（日本経済評論社、2019年4月）の2冊です。いずれも現代社会の変動の諸要因の分析を基に生協という協同関係の新たなデザインを探究したものです。

「あり方研」はその後、コロナ禍もあり、しばらく開催できませんでしたが、今年3月から研究活動を再開しました。第1回のこの研究会で、向井さんによって紹介された岐阜県白川町の有機農業グループ「ゆうきハートネット」のフィールドワークから今後の課題の共有を図っていこうと決めました。都市からIターンで白川町黒川地区の有機農業へ就農した40歳前後の人たちの働き方・暮らし方が「協同」の新たな「デザイン」の形を表していると思われたからです。2021年7月30日、31日、渡辺事務局長さんの企画にしたがって岐阜県白川町の有機農業を営んでいる人たちの組織である「ゆうきハートネット」（1998年設立）のつながりの中から幾人かの地元農業者、Iターン農業者を中心にお話を伺いました。

お話をお聞きした人たちの選定は、名古屋栄の「オアシス21」で「オアシス21 オーガニックファーマーズ朝市村」を主催する吉野隆子さんのコーディネートによるものです。この朝市村は、吉野さんが都市の消費者と山村地域の生産者を結ぶことによって白川町の有機農業の継続性を支える役割を担っています。まだ聞いていませんが、吉野さんの「結び方」は今後の

研究課題の一つだと思っています。生協がどのように生産者と向き合うのかを考えるきっかけになると確信しています。以下、参加した皆さんの視察後のまとめの文章に基づいて、簡単ですが、お話を聞いた方の紹介をしておきます。

2. 有機農業の担い手

今回の訪問でお会いした方々を紹介していきます。まず何よりも地元で有機農業へと転換して、その後の発展の核となった佐見地区の中島克己さんと西尾勝治さんのお二人。中島さんは、ご自分が作っている「赤とんぼ米」の田んぼのあぜ道に置かれているベンチに座って田んぼを眺める時が「至福の時」だそうです。有機栽培の一つの証が田んぼに様々な生き物が棲息して動いていることです。その生きものの中の一人として自分の存在を感じておられるように見えました。私たちには見えない、田んぼを舞台にした生命の営みが見えるのでしょうか。西尾さんはNP0 ゆうきハートネットの元事務局長さんで、名古屋で高校の教師をしておられました。Uターンして農林業に従事、中島さんたちのゆうきハートネットに参加、有機農業の担い手の拡大に尽力されてきました。西尾さんには、白川町の農業研修施設「黒川 Maruke」を案内していただいたり、次に紹介するIターンで有機農業を始めた若い世代の仲間のところへ案内していただきました。

Iターンで就農した6人の方々に会うことができました。まず室山というところの棚田を「オーナー制度」によって管理している椎名啓さん。都市の住民がオーナーになってお米づくりをする、その田んぼの日常管理をします。「たんぼトラスト」というのだそうです。冬期には林業や狩猟もするそうです。椎名さんの棚田を見る目も中島さんのそれと同じような感じを受けました。

農園「暮らすファーム SUNPO」の児嶋健さん。いろんなことをやっている人で「農業」のイメージが変わります。主に有機野菜の栽培ですが、直売はもちろん、パン屋さんとのコラボや農園のファンを広げる工夫として農園には山羊や羊を飼っています。テーブルもあり BBQ もできるようになっています。奥さんは有機米の藁を使ったしめ縄やドライフラワーをつくり、そのショップも農園内にあります。有機農業は人が安全に出入りできるところだからこそ様々な工夫を思いつくし、実際にこのような多角的展開が可能になるのでしょう。

「五段農園」農園の高谷裕一郎さん。お伺いしたときはたい肥を作る作業をしておられました。農学部を卒業して種苗会社に勤務後、Iターン。微生物の研究をやっていたのでそれがたい肥作りに役立っているそうです。有機発酵の完熟堆肥です。「けんど君」という培養土を販売しています。昨年から堆肥の学校も始めたそうです。有機農業に入って、野菜をつくる中で、土づくりへの関心を強め、培養土作りを始めたのです。

以上の3人の方とは田んぼや農園、作業場で会うことができました。古民家をリノベーションした宿泊先の「晴耕雨読とみだ」では、2010年に名古屋から移住してきた伊藤和徳さんと同じく名古屋から移住してきた塩月祥子さんにお話をお聞きしました。

伊藤さんは、少量多品種栽培で「和ごころ農園」を経営しています。就農したころの大きな苦労をお聞きしました。支えはあるものの、自分の農法を確立する過程はしんどい苦労の連続だったようです。そこも見落としてはならない側面です。それにもかかわらず、その苦労を活かして新規就農の研修者受け入れを始めました。たくましいです。「とみだ」での説明もパソコンの映像で慣れた感じでした。まるで大学院生の報告をきいているような錯覚を覚えました。それほど手馴れています。

塩月さんは長男の食べ物アレルギーが移住の大きな理由でした。今は「白川町移住交流サポートセンター」で勤務しています。移住年数

も長くなり、白川町に住み続けるための条件作りに発言をしておられます。現在大きな課題は高校進学支援の内容を議論しているようです。つまり自分の地域社会になっているということです。

以上、簡単ですが有機農業の担い手になっている人たちの紹介です。このほかにも有機野菜のおいしいランチをつくるシェフ保木本健太さん、そこで手伝っていた木こりの田代さんにも会いました。有機農業を基盤にした仕事のネットワーク、相互の助け合いのネットワーク、すなわち地域を縦横に協同関係が形成されているのです。ヒューマンスケールの生産が地域の環境を守ることになっていることも実感としてわかります。

3. 白川町の

有機農業ネットワークというデザイン

有機農業への就労がかくも個性豊かな仕事と生活を生み出していることに驚いたわけですが、逆に言いますと我々は「有機農業」という言葉に単調な静態的なイメージしか持っていないのではないかという気がします。農業そのものに対しても中身の無いイメージをつくってしまったのではないか。したがって生産者と消費者のつながりは、生産者の努力を理解することと、躍動感のある豊かさを感じることでできる形が必要だろうということです。この点で吉野さんの「つきあい作り」を学びたいと思います。

改めてヒューマンスケールの市場の可能性を考えます。以前、「あいちの米たまご」を勉強したときにも感じましたが、改めて多様化、多元化する社会において、こうした域内循環の経済の可能性を論じることが必要です。「小さな経済」（小田切徳美）といった見方にも通じるかもしれません。

この調査を起点にさらに課題を深めていきたいと思っています。

(おぎそ ようし)

情報クリップ

co-opnavi 2021. 11 No. 834

チームワークを大切に生き生き働くための部門リーダーのリーダーシップ

日本生活協同組合連合会 2021 年 11 月 A 4 判 32 頁 367 円 (消費税込)

<コープ商品のある風景>

コープあいづ「コープフレンズあいおい」の商品活動
コープあいづ コープフレンズあいおい委員長
児山ヨシエさん

特集

チームワークを大切に生き生き働くための
部門リーダーのリーダーシップ

<今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見>
生協共立社 斎藤高彬さん

<想いをかたちに コープ商品>

CO・OP みつくすきやろっと

<生協大好きママコブ山さんの 教えて! CO・OP 商品>

CO・OP 時短生活 洗顔シート

<コープ商品 虫の目チェック!>

子どもが楽しめる遊び心のあるパッケージの仕掛け

<日本全国 宅配現場におじゃまします!>

福井県民生協

<生協の仲間づくりの今>

おおさかパルコープ

<SDG s REPORT>

コープあいち

<明日の暮らし ささえあう CO・OP 共済>

いわて生協

<この人に聴きたい>

しめかざり 研究家

森須磨子さん

<ホット navi>

コープこうべ / コープおおいた

月刊 J A 2021. 11 vol. 801

協同組合組織の仲間たち③

全国農業協同組合中央会 2021 年 11 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,204 円 (消費税込)

特集

協同組合組織の仲間たち③

ーコロナ禍のワーカーズコープの取り組み
中野 理

スゴイ農業、スゴイ J A

J A 自己改革の現場から

J A 相模原市の J A 自己改革と組織基盤強化の取り組み
ー横串をさす協同活動研究会とみどり組合の活性化
小林 元

きずな春秋 ー協同のこころー

童門 冬二

展望 J A の進むべき道

地域農業振興計画の策定を通じた

「次世代総点検運動」の取り組みについて

脇岡弘典 (J A 全中常務理事)

協同組合の理解促進に向けて

第 8 回 実習を通じて協同組合の存在意義を確認する
馬場 治

私のオピニオン

スポーツ栄養学から見た“おコメ”の重要性和魅力
ースポーツ現場からのメッセージ 清野 隼

J A 全中 マンスリーレポート 10 月

協同組合と SDG s 第 30 回

持続可能な生産に取り組む日本の漁業

瀬戸内海のサワラを増やした 11 府県の連携

全国漁業協同組合連合会

協同組合の広場

(日本生協連、J F 全漁連、全森連、生活クラブ連合会)

海外だより [D.C. 通信] 連載 125

コロナ禍から 1 年半が経過した農村の姿 伊澤 岳

生活協同組合研究 2021. 11 VOL. 550

メンタルヘルスと対策をめぐってー新型コロナウイルスの渦中でー

公益財団法人 生協総合研究所 2021 年 11 月 B5 判 72 頁 定価 550 円 (消費税込)

■ 巻頭言

食料システム変革への協同組合の役割

白石正彦

特集 メンタルヘルスと対策をめぐって

ー新型コロナウイルスの渦中でー

メンタルヘルスを理解するために

阿部浩之

職場とメンタルヘルスの課題 江口 尚
 コロナ禍の職場のメンタルヘルス対策 種市康太郎
 コロナ禍におけるテレワークと

職場のメンタルヘルスに関する法的課題 北岡大介
 「生活者」から見たわが国における精神保険医療福祉改革 池田真典

■研究と調査

大規模災害と共済協同組合に求められる役割
 — 4 つの共済組織の比較を通して — 門山晃士

■本誌特集を読んで (2021・9) 高浦美穂

■寄稿

『日本の生協運動の歩み』発刊に関連して
 — 歴史と歴史編纂について — 斎藤嘉璋

■新刊紹介

生協共済研究会編 『生協共済の未来へのチャレンジ』

武田俊裕

野原敏雄著 『友愛協同論』

鈴木 岳

●公開研究会 (オンライン)

英国初期の協同構想と論争から学ぶ (2021.12.21)

生協共済の未来へのチャレンジ (2022.1.17)

●2021 年度生協総研賞・

第 19 回助成事業対象者決定のお知らせ

●生協総研賞第 13 回「表彰事業」授賞式のご案内

文化連情報 2021.11 No.524

第 29 回 JA 全国大会決議の実践へ コロナ後の社会再建に貢献する厚生連医療・農協福祉

日本文化厚生農業協同組合連合会 2021 年 11 月 B5 判 88 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

農協組合長インタビュー (76)

助け合い運動から本格的な福祉事業の発展へ

田原要一

第 29 回 JA 全国大会決議の実践へ

— コロナ後の社会再建に貢献する厚生連医療・農協福祉
 伊藤幸夫

コロナに負けない!! 新型コロナを正しく恐れ、
 地域包括ケアの実践と安心の地域づくりを目指して 福地 宏

二木教授の医療時評 (196)

高額新薬で医療費は高騰するとの言説の再検討

二木 立

一体感を生んだ「オール厚生連」による

大規模接種会場の運営

秀野功典

厚生連病院長インタビュー集 II

「コロナを越えて 厚生連医療の挑戦」を発行しました
 会員の挑戦 コロナに打ち克つ

山梨県厚生連健康管理センター

第 39 回厚生連薬剤師研修会を開催しました

徹底解説! みんなで学ぶ農協福祉事 WEB 道場 実況中継⑤
 居宅支援、デイサービス、訪問介護事業所の運営戦略

鈴木佑理

アメリカの医療政策動向 (16)

バイデン政権の薬価引き下げをめぐる動向 高山一夫
 変わる日本のまちづくり (17)

企業組合で自立とチームワークのまちづくり

— コミュニティカフェでる・そーれ

(青森県五所川原市) —

杉岡直人・畠山明子

ドイツの対 COVID-19 戦略

ウィズ・コロナで規制解除

吉田恵子

私たちは何を食べているのか (11)

家畜、家禽の「品種改良」

安田節子

協同組合の精神を共有した仲間の存在を実感

JCA 新人向け学習交流会に参加して

多様な福祉レジームと海外人材 (42)

家事支援従事者の選択肢

安里和晃

臨床倫理メディエーション (56)

日本の予防接種政策におけるリスクと責任 (6)

— 価値共創へ向けて

中西淑美

古代史の謎に迫る

日本古代国家と新旧二つの南朝鮮系渡来集団 村上一彦

アフガニスタンから見た世界と日本 (18)

アフガニスタンの悲劇の解決には

国際社会の優しい対応が不可欠な要素です

レジャーカレッジ カレド

デンマーク & 世界の地域居住 (149)

地域性を踏まえたレリスタッド市の「近隣センター」

松岡洋子

熱帯の自然誌 (68)

第二次世界大戦と日本人 (1)

安間繁樹

◆第 25 回厚生連病院と単協をつなぐ

医療・福祉研究会 開催のお知らせ

◆第 8 回厚生連放射線科医療機器

ライフサイクルコスト会議 開催のお知らせ

□自著を語る

オランダ・ミラクル

松岡洋子

▼線路は続く (157)

都市鉄道のパイオニア阪神電車

西出健史

▼虹のかけ橋

— 新宿農協だより

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

地域と協同の研究センター関連の書籍紹介



友愛協同論—ヒト・人間社会と友愛原理 未来社会づくりの一試論

著者：野原敏雄 発行：友愛・協同研究会 2021年6月 価格：1,500円＋税

※申し込みは研究センターまでご連絡ください。

お送りする場合は送料を実費いただきます。

目次

1. 人類の出現と自然環境 「氷河の子」はどう育ったか
2. 人間集団のなかでの個の形成とその意味
3. 人類の世界的拡大を可能にしたもの
4. 人間社会の形成 神を乗り越えた思索
古代から中世における思想の変化を中心として
5. アダム・スミスへの社会哲学的系譜を探る
6. 『国富論』を読みこなして得られたこと
7. アダム・スミスとロバート・オウエンの隙間
8. スミスとオウエンの隙間を埋める近代社会の諸見解 消費と協同の発見
9. 未来社会と、それへの道—自由と友愛の「相克」が平等社会をつくる—

内容紹介（熊崎辰広さんから）

友愛・協同セミナー2021(11月13日開催)は、野原敏雄氏による、これまでの友愛研究のひとつの集大成となる報告となりました。内容は、「友愛協同論—くらしの地平から」の姉妹編として出版された、この友愛協同論を学ぶものとなりました。野原氏は「友愛協同論—くらしの地平から」は現状分析を踏まえた「今あるべき協同論」であり、評価できるが、今後それをいっそう具体化する研究作業のためには、「未来社会」展望について欠かさない。そのためには自由・平等・友愛が調和できる未来社会について大まかな社会像が必要—として、自由(個人)と友愛(集団・種)の協調によりすべての人が満足な生活で生を終える社会(センによるマルクス資本論3巻のメモ解釈による自由社会 well being)の実現を目指すとされます。

2011年の「友愛と現代社会」、2017年の「友愛と協同についての覚書【未定稿】」に続き3冊目となりました。本書の概要は、Ⅰ原始・古代社会—集団の永続のための個の抑圧と多集団の圧殺(1～3) Ⅱ中世社会—集団(神)から人への苦闘と個の自由の模索(4) Ⅲ市民社会—スミス・オウエンの再評価と another 社会形成(5～6) Ⅳ近代社会—ラスキン・マルクスによる協同と消費の発見(再評価)(7～8) Ⅴ現代から未来を—3つのヒドラ(世界核戦争の危機、地球環境破壊の危機、無限に広がる富の格差) 退治と平等社会に至る道筋(文化論なども)、またここではセン経済学の魅力は、スミス・マルクスを継いで、個人と社会の関係を明確にし、個人間の価値交換の公正さの教理的正確さが作り出す社会正義尊重の姿勢は今後のAI社会での思考では一層重要—と強調されています。

地域と協同の研究センター12月の予定

地域と協同の研究センターFacebook

下記QRコードをご覧ください。

- 12月1日(水)～12月3日(金) 難民食料支援物資受付
 1日～3日 ICA世界大会
 2日(木) 金城学院大学「協同組合論⑩」
 7日(火) 尾張地域懇談会
 9日(木) 金城学院大学「協同組合論⑪」
 11日(土) 難民食料支援仕分け・発送
 16日(木) 金城学院大学「協同組合論⑫」、第7回協同の未来塾
 17日(金) 第8回組合員理事ゼミナール
 18日(土) 第18回東海交流フォーラム第2回実行委員会 第3回理事会
 23日(木) 金城学院大学「協同組合論⑬」

Facebook QRコード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS 第207号

発行日 2021年11月25日 定価 200円(税・送料込み)

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 鈴木 稔彦

〒464-0824 名古屋市中区千種区稲舟通1-3-9 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP http://www.tiiki-kyodo.net/